五味川純平
ごみかわじゅんぺい
1916年　満洲に生まれる
東京外語英文科卒
満洲にて就職，応召
1948年　引揚げ
著　書　『人間の条件』『自由との契約』
『孤独の賭け』『歴史の実験』
現住所　東京都渋谷区神宮前1—15—3

戦争と人間　1　　**定価　260円**

1965年2月16日　第1版発行
1965年3月20日　第21刷発行

著　者　© 五味川純平
1965年
発行者　竹村一
印刷所　暁印刷株式会社
製本所　永井製本所
発行所　株式会社　三一書房
東京都千代田区神田駿河台2の9
電話東京(201)9581～5番
振替東京　84160番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

三一新書 464

戦争と人間

1

運命の序曲

第一部

五味川純平 著

三一書房

感傷的まえがき

三年になろうか。その日、イルクーツク郊外の雑木林のなかに行儀よく横たわっている長方形の墓には、淡く雪が積っていた。雪を払うと、故人の氏名ではなくて、番号が出てきた。あの敗戦直後、シベリアに抑留されて死んだ日本人の墓である。

ソ満国境で戦死し、そのまま白骨となって山野に朽ち果てるか、シベリアのどこかの墓地に、番号だけを与えられて葬られるか、そのいずれかしかないような刻々を、私も生きていた。もうやがて二十年になる。自分が埋められたかもしれない墓地を、一人の旅行者として訪ずれ、もはや永遠に語ることをしない死者の声を忖度(そんたく)して、私は文字どおり感無量であった。

だれも死にたくはなかったのだ。それでも死ななければならなかった。なぜ、死なねばならなかったか、理由を知り得た者は一人もなかっただろう。あの戦争の時代の意味したもの——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

特定少数の、あるいは不特定多数の人間の非人間的な作為と不作為は、そこに埋められた人びとにとってと同じように、今日生きている者にとっても、なお明らかにされてはいないのである。

私は、僥倖とか奇蹟とかしかいいようのない百余日を生きながらえ、十年の歳月ののちに、消耗品でしかなかった男たちの物語を書いた。私にはそうすることが必要であった。私は自分の体験の順序にしたがって、物語を展開した。植民地生活者のまやかしのヒューマニズムにまつわる贖罪の意識と、兵営生活から戦闘へとつづく夢魔に憑かれて、私にはそうしか書きようがなかった。私はそこを潜り直して、早く潜り抜けたいと希っていた。あの戦争の時代を語るのに、『人間の條件』三千枚で充分であると考えたわけではない。私はただ、過去から復員して、現在の時点へ近づきたいと考えたにすぎない。

けれども、シベリアの墓地の沈黙は、砲弾の下で生死が分たれるまで同じ運命を生きていた私を、勝手に生かしてはくれないようである。

戦闘の前夜、私の分隊の初年兵が私にきいた。明日死ぬことが怖ろしくはないか、と。圧倒的に優勢な敵機械化部隊の総攻撃を前にして、私たちには九九式短小銃しかなかったのである。だれ一人として生き残る可能性があるとは思えなかった。私たちは後方部隊が退却するための「捨て駒」にすぎなかった。私は、無論、死を怖れていた。人生をはじめたばかりであった。

したいことがいっぱいあるように思った。生きれば生きられるはずの莫大な時間を、その夜かぎりで失うことが、いかにしても惜しまれた。強力な砲火の前には恃むに足りない丘陵地帯の斜面陣地に、自分の墓穴となるタコ壺を掘って、そこで死ぬために生きてきたことを承認するのは、たまらなかった。悔んでも、しかし、もうおそすぎたのだ。怖れたところで、どうにもならない立場にいるということだけが、わかっていた。

それで、私は古年兵ヅラをして云ったものだ。「俺も怖ろしいよ。だからって、怖れてどうなる？　危険は、直面するまでは、怖れろ。直面したら、怖れるな。俺たちは直面したんだ」

私たちは、砲弾の気紛れと、それぞれに個人差のある殺人技術に、自分自身を委ねるほかはなかった。私は、その夜、タコ壺のなかで思った。幾百千万の男女が、この戦争の十数年間に、どれほど愛し合い、求め合い、一度限りの人生が虚しく消えてゆくことを、どれほど悶えただろうかと。私は猛烈に人生を恋した。男と女のいる生活の風景を。

翌日の戦闘で、私が属した中隊百五十八名は、私を含めて四名になった。

私は戦争が人間に教えた歎きと怒りは、その一断面を『人間の條件』で書き得たかもしれない。けれども、戦争と人間の、多様な、重層的な、錯綜した、いのちがけの、しかも時にはきわめて無意味な諸関係には、ほとんど筆が及ばなかったことを自覚せずにはいられなくなった。ソ連への短期間の旅行を終え、日常生活に戻ってから、その問題は、私のなかで凝結作用と膨

腹作用を反覆していたらしい。正直、私には、取組んだら大変なことになるというためらいとおそれがあった。私は、それとの対決を先へのばしていた。決して逃れられないことを知りながら。

私は信心や墓参などにはおよそ縁のない人間だが、この仕事に関しては奇妙に墓に縁がある。去年の秋のはじめ、ある偶然が、私を多摩墓地へ連れて行った。昭和十五年に別れたきり、ついに会うことのできなかった人の墓を訪ねたのである。私は帰国したとき直ぐにそこを訪ねるべきであった。私はそれをしなかった。そこへ行くのが怖ろしかった。永遠の沈黙で私を迎えてくれる人と会うことが。

私は満洲から引揚げて来て、はじめて上京した日、八重洲口の公衆電話で、その人の婚家先の所在を求めた。電話帳をめくる指が慄えていたのを憶えている。私は、その人の声が、受話器を伝わって聞えて来るものとばかり思いこんでいた。けれども、戦争の時間が経ちすぎていたのだ。そのとき私が知り得たことは、その人が既に故人になっているということだけであった。私が軍隊に行って、ソ満国境を転々としていたころのことらしい。

――そのころ、私は苦学生であった。生きて、通学する、それだけで精いっぱいであった。日々、これ、苦渋に満ちていた。それでも、私は、幸いなことに、温い心が実在することを知る機会に恵まれていた。私の青春の回想は、だから、その心を迂回することはできなかった。

生きてさえいれば、また会える。会いたい人には会えるのだ。戦闘から敗戦兵へと、生と死のはざまを彷徨して、心ならずも殺人の熟練者となりながら、私はそう念じていた。没論理は承知の上である。私は、まだ殺戮に汚れていない若い苦学生であったころの私に返って、私を励ましてくれたその人の前に突然現われることを、どれほどひそかな愉しみにしていたかしれない。私は返らぬ昔に帰ろうとしたのだ。

回想などするものではない。あるとき、ある電話口で、突然に、過去と現在が断絶したりする。——私が戦線で百五十八分の四の幸運を拾ったとき、その人は既に死んでいたのである。私が、なんと、これでその人にも再会できると思いながら、山野を餓狼のように歩いていたときに。

その人の球形の墓碑の前で、私は考えた。私が手とり足とりして教えた初年兵はみな死んだ。私が会いたいと念じていた人もまた死んだ。人の血で汚れた私は生き残った。おそらく、動物的な警戒本能と、無慈悲な闘争に耐える神経だけが、私のなかで極度に研磨されたせいである。そういう人間だけが生き残り得た。無神経な、無責任な、無節操な人間と同じように。それでは、私たちの生きてきた時代は何だったのか！

私は計画を先へのばしていたテーマに、急に対決したくなった。

作家は作品のなかで己れを語ればいい。だから、まえがきの趣旨は、内扉に掲げたソフォク

レスの数行で尽きているようなものである。私は、小説以外の場で、個人的な感情の軌跡を記すようなことは好まない。それを敢てしたのは、一つには死者たちの沈黙に心を引裂かれるからであり、もう一つには、語ることの永久にできない世界へ追いやられた人間も、生きていながら知ることのできなかった人間も、猿まわしの猿以下でしかなかったと思う痛恨からである。

私は、自分の体験によっても、この仕事のための調査の結果からも、国家のためと称して戦争を発起した人びと、その戦争をものものしい言葉と強権をもって「指導」した人びとを、一切信用しない。けれども、彼らの在り方については、想像力の及ぶかぎり理解の眼を届かせなければならない。批判することも非難することも簡単である。彼らと作品のなかで生活を共にすることは、簡単ではなかろうと思う。被害者と加害者とには、別個の原則がある。被害者でありながら、同時に加害者でもある者もまた、別個の原則の制約下にあるはずである。

私と私のパートナーは、時間と能力の許すかぎり、文献・資料の踏査と照合をしてきたし、今後数年にわたってつづけるわけだが、それでもなお、誤りは避けられないだろう。私はそれを怖れない。ときには、かなり思いきった独断をも敢てしなければならないかもしれない。事件当事者たちの記録にしてからが、故意にか、忘却という都合のよい作用によってか、事の真相を歪曲したり、糊塗したり、さまざまな相違点を見せている。私は、それらのうち、物語としては煩雑であり、しかも基礎構造の部分としては必要なかぎりを、「註」で補うことにした。

この長篇の終幕ははっきりしている。しかし、そこへゆきつくまでに、どれだけの巻数と年月が必要か、そして、そこなわれた歴史の質量を、人間という比重の単位によって測定しようとする私のこの途方もない試みが、どれだけ果されるか、予測はできない。

書きだしたら、書きつづけるだけである。私が『人間の條件』を発表したとき、自分をよほど賢明だと思っているらしい男が、「コケの一念」と評した。結構である。もう一度頂戴することになるだろう。

まえがきが長くなりすぎたようである。小説は小説をして語らしめよう。物語は五月のある夜からはじまるのだ。

一九六四年　九月

著　者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

戦争と人間

果てしなく流れる歳月は
すべて秘めたる物事を明るみにもたらし
すべて人びとの知れる事柄も葬り去る
……

ソフォクレス

運命の序曲

第一部

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com